相互作業の観点からの係わり合いの実践に接して

当ＨＰ「映画『わたしの季節」』を鑑賞（「雑学」バックナンバー「書籍等読後感関係（Ⅱ）Ｐ 2005.06.26.：参照」)」中で、「障害児・者との相互作業の視点から取り組む仲間を知る自分としては、少々もの足りなさも感じた。」と記した。

後日、正にそうした視点を持つ後輩の、障害のある幼児の遊びでの係わり合いの様子を、ただ１時間半撮り続けただけのビデオを見る機会を得た。

つくづく「やっぱり、彼は凄い！」と思いながらビデオを見ていた。

障害児の教育、療育、保育、子育て等が、如何に係わる側の視点、意識、姿勢、工夫の仕方、話しかけ方、そのタイミング等々が大事かを如実に気づかされる実践のビデオであった。特に理屈では何となく理解しているが実践が伴わない自分だけに、彼の係わり合いの実践の様子には脱帽あるのみ！

彼に早速、「君の実践は、凄い！」と伝えたところ、「昔、阿部さんに我々の仕事の中で何が大事かを教わったからできることで、基本中の基本を叩き込まれたから。」との返事。

私が何か教えたというより、彼が感性豊かで学究熱心であり、実践を重ねる中で自らの検証を怠らなかったということ！今は、私が彼から学ぶことが多い。

彼は、障害児との係わり合いは「いつもいつも迷いの連続」ともいう。「人間は努力している限り惑うもの（ゲーテ)」とか。正に、彼は日々努力しているということであろう。

また、「人生の意味は、他人が人生の意味を考える手伝いをすること（フランクル：夜と霧)」とか。「意味のない行動はない。」との観点で実践に取り組む彼は、係わり合う相互作業、双方向性の中で、障害児共々お互いの人生の意味を感じ合ってるのだろうなぁ～。

「『こころ』というものは、もともと相手を思いやる想像力を通してしか、見えてこないものだ。」という人もいる。

最近の青少年の家族、友人を被害者とする悲惨な事件を耳にすると、「 相手を思いやる想像力」が育つために、双方向性、相互作業の観点からの係わり合いを、家族間だけでなく我々みんながもっと意識すべきと思う。

ビデオで、好きな彼と生き生きと係わり合っている幼児の表情、行動調整の様子を見ていると、つくづくそう思う。

（2005 年 6 月 30 日　記）